

第9分科会

子どもとともに作り出す環境構成

～持続可能な社会の担い手として

成長していけるようにSDGsの取り組みを考える～

助言者	塩川 哲郎 (かごしま環境未来財団事業課長)
司会者	小湊 梨絵 (宇宿幼稚園)
問題提起者	藤田 順子 (ひまわり幼稚園)
記録者	福 彩音 (ひまわり幼稚園)
記録者	吉村由佳子 (ひまわり幼稚園)
ホスト	有村 修次 (こまつばら幼稚園)
ホスト	山下 拡 (こまつばら幼稚園)
運営委員	商崎 淳一 (こまつばら幼稚園)

【研究課題】

保育実践

【研究・研修の視点】

教育とは社会に求められる人を育てる営みであり、そこには社会的背景が反映される。今、社会が大きく変化している中でSDGsの重要性が叫ばれている。私たちは日常に不自由なく生活しており、水道の蛇口をひねれば水が出てくるのは当たり前な生活をしている。本園の子どもたちにも手洗いのときに水を出しっぱなしにする光景や折り紙を無造作に使っている姿が見受けられる。これからの時代を生きていく子どもたちに求められているものを考えたときに、今を生きる私たちが子どもと共に様々な社会問題に目を向け、尚且つ、子どもたちによりよい社会を目指していく力が養われるように育成することが必要とされる。

2020年度からの学習指導要領にも「持続可能な社会の創り手」を育成することが求められており、持続可能な開発のための教育、(ESD)を推進することが打ち出されている。また、幼児期に育みたい資質・能力を踏まえての教育活動にもつながる。

私たち保育者が持続可能な社会のために、今から様々な問題について感じ取り、考え、周りの人たちと話し合い、取り組んでいくことが大切である。そこで、環境への意識が身につくように子どもたちの視野を広げ、日常生活で行動していくことを目指したところからの環境づくりを考えることとした。

【研究の手がかり】

- ・ 職員会議に於いて子どもの環境を考えた際に、子どもを取り巻く環境問題を議題として考える。
- ・ 年中児活動の公園清掃を見直し、SDGsを意図した活動内容を探る。

【研究計画】

◎令和4年度

- ・ 前年度までの研究・研修を振り返り、園全体の取り組みとして、各クラスにおいての活動を行う。
- ・ 年長児対象「Aの部屋(年長児週1利用)」での活動で実践に当たる。

◎令和5年度

- ・ 令和4年度に取り組んできた環境構成の内容を見直し、今後の課題として活動の充実を図る。

【発表の概要】

1 研究・研修テーマのとらえ方

持続可能な開発とは、共に成長し、他者を思いやり、資源や環境を大切にする取り組みである。地球の未来を守る教育を考える際に、子どもたちの想像力が必要とされるだろう。直接体験を通して自分で考えるようになり、そこでの学びや気づきが想像力につながっていくと考える。このようなことから子どもたちが、地球の環境と自分がどう関わっているのかを理解し、自分の問題として考えられるように環境づくりをしていきたい。

2 研究の内容

- (1) 「もったいない」について考え、日常生活の中で気づけるようにする。
- (2) 幼児の生活の中で身近なところから取り組んで、具体的な体験を行う。

3 研究の方法

- (1) SDGs を子どもに提供するための活動内容を考える。
- (2) 子どもの気づきを大切に活動がより深まるように活動内容を考慮する。
- (3) 子どもの姿を職員で共有する。

4 実践例

もったいないってなんだろう？ (5月26日)

【1学期】 水がもったいない (6月2日)

【2学期】 ごみがもったいない (10月13日)

【3学期】 食べ物がもったいない (1月12日)

作品展：「3R リデュース・リユース・リサイクル」(2月17日～)

5 まとめ

SDGsという初めての取り組みに、子どもの日常生活の身近なところから始まり、一つの活動が展開し、興味関心の広がりを感じた。直接体験を通しての学びから、節水、給食の完食、紙や糸の使い方など、日々の保育の中で自然に様々な「もったいない」に気づく姿が見られるようになった。また、園での活動を家庭でも行う子どもの様子を保護者から聞き、学びにつながったことを確認することができた。子どもたちの大事にしようとする気持ちが伝わってきて嬉しい。尚、園内に掲示されたポスターは、年中・年少児の環境の一つとなり、活動の広がりが今も継続されている。取り組みを通して、日本と異なる様々な国の環境に思いをはせることも貴重であった。作品展においては、これまでの体験から子どもたちの発想、思いが豊かに育まれ、心を通わせ合うことのできる仲間と一緒に再利用の喜びを味わうことができた。また、制作過程を通しての一つひとつの気づきが学びにつながり、物を大事にすることの裏付けになったように思う。

取り組みの最後に、SDGsという言葉を伝え、「世界の人々が元気で暮らせるように、自分ができることを考えながらできる人になりたい。」と全員でお祈りをした。

子どもは環境の中で育つもの、大人が子どもの成長に必要とする環境を作らなければならない。子どもたちのこれから歩いていく社会から、私たち大人が様々な問題を感じ取り見つけ、そしてそれを子どもたちに示していくことが必要とされるだろう。そうすることが社会全体に大きな利益をもたらし、今回のテーマにも掲げられている、社会に開かれた質の高い幼児教育につながっていくことと感じた。

6 今後の課題

- (1) SDGsの活動を行う際に、子どもの生活に身近なところから提供できるよう、活動の在り方の工夫を考え、また、活動を通して子どもが育つ過程を見守る。
- (2) 令和4年度に引き続き、子どもと共に環境を作る際に、情報の提供の在り方、関心があるような工夫、問題に対しての子ども自身の考えを大切に活動内容の充実を図りたい。

【討議の柱】

- ・ 幼児の育ちの視点から SDGs の教育活動について考える。
- ・ 時事問題をどのように職員間で共有し、どのように子どもへ伝えるかを考える。

【討議内容】

1 問題提起に関する質疑応答

(問) SDGs の取り組みについて職員で研修を受けたのか。また、なぜ SDGs に取り組もうと思ったのか。

(答) 職員で研修等は受けておらず、問題提起者が中心となって取り組み、職員会議や終礼等で情報を共有して意見を出し合い、活動における子どもたちの様子や変化を伝え合った。

世間で SDGs が叫ばれるようになり、園長からの提案をきっかけに何か子どもたちに自然に身に付けてほしい、感じ取ってほしいという思いから活動を始めた。

(問) 年少児、年中児はどのような SDGs の活動をしているのか。

(答) 子どもたちが身近に触れることが出来るゴミ（保育室に落ちているゴミ、マクドナルドで子どもたちが口にしていないハッピーセットのゴミ等）を分別してもらい、また、目に見えるゴミだけではなく、残飯のことにもつなげて考えた。年齢や家庭環境にもよるが、まだ「もったいない」という言葉の意味を理解していない子どもたちが、本当にその意味を感じることが出来る日を期待したい。

(問) 縦割り保育で SDGs の活動をどのように組んでいるのか。

(答) 横割り活動において年長児は近くの永田川沿い、年中児は公園へ行きゴミ拾いをし、その中で自然や季節を感じられるような時間も設けている。また、日常生活の中でも、給食の残飯を見て感じたことを話したり、リサイクルしたもので制作したりと、この活動は様々な場面で活きているのではないかと思う。

2 グループ討議

(1) 幼児の育ちの視点から、SDGs の教育活動について考える。

- ・ ゴミの分別や再利用、残食を減らす等、知識はあるが体験がないため、身近なところから子どもたちと共に考え、活動へとつなげていく。
- ・ 園で野菜を育て成長を観察し、収穫した野菜を持ち帰り食べたり、給食の際、食べきれる量を注ぐことで完食出来るようにしたりと取り組みを行っている。
- ・ 保育者と子どもとの日々の会話のやりとりが SDGs を考えるきっかけとなり、もったいないという感覚を身に付けることが出来るのではないか。
- ・ 絵本から導入し、園外活動で落ち葉拾いをしたものを使って制作活動につなげる等、様々な活動の中に SDGs を取り入れていく。日常生活の中で子どもたちが自ら意識することが出来るよう、言葉で伝えるだけではなくポスター等でも働きかけ、日々の積み重ねを大切にしていく。
- ・ 子どもたちが体験を通して学ぶことの大切さを感じた。SDGs の活動をする中で、子どもたちが自分だけではなく周りの人も大切だと気づき、自ら進んで取り組むことで心の成長へとつなげていきたい。

(2) 時事問題をどのように職員間で共有し、どのように子どもへ伝えるかを考える。

- ・ 職員間での時事問題の共有は朝礼やミーティング等の際に行っているが、非常勤教諭等も合わせ全職員で共有することについては課題が残っている。子どもの発達段階に応じて、子どもたちにわかりやすく伝えるために絵本を用いる。
- ・ 朝礼等で新聞やニュースの話題を職員間で共有している。様々な情報にあふれている状況の中、子どもたちにどのタイミングでどのように伝えていくのかは、目の前にいる子どもの年齢や発達段階により変わってくるため、視覚教材を用いる等工夫し、今ある現状に子どもたちと共に向き合っていく。

- ・職員会議等で園長先生より時事問題について話があるが、子どもたちにわかりやすく伝えることが出来ずにいることが現状。時事問題に合わせて紙芝居や絵本を作る、保育者がニュースキャスターになり園内放送や動画を用いて伝える、新聞等の写真を掲示し、子どもたちが自由に感じる事が出来るようにする等、子どもたちにもわかりやすく、楽しく伝えることが出来るよう工夫したい。

【助言者のまとめ】

○ 発表を受けて

保育者が、「もったいないと感じるのはどんな時?」「そうしたらどうなる?」等、子どもたちに問いかけることで子どもたちが気づき、保育者がそれを受け止め、感じたことを素直に伝え合うということにつながった。また、活動の中で、子どもたちの考えをどのように引き出し活かしていくのか、次の気づきへどのようにつなげていくのか、ということを基に体験を積み重ね、子どもたちが自分で出来ることを考えながら、世界中の人へ気持ちを向けることにつながったところから、子どもへの問いや体験学習の大切さ、気持ちを発表させることで次の発見へとつながるのだということを感じ、幼児教育の大切さを感じた。子どもの発見や言葉には、大人を変えていく力がある。

○ SDGs について

SDGs とは、世代を超えて全ての人自分らしく良く生きられる世界を次の子どもたちに引き渡す。そのための 17 の目標と 169 の達成基準、232 の指標から成る国際的な開発目標である。「誰ひとり取り残さない」をスローガンにこの目標を達成するため、未来を起点に発想するバックキャスティング思考・実践と現状から改善するフォアキャスティング思考・実践を用いて様々な取り組みや支援を行っている。例えば、水汲みが子どもたちの仕事であるアフリカに、水を運びやすくする道具を開発し支援する（フォアキャスティング思考・実践）。更には空気中から水を取り出す装置を開発設置する支援（バックキャスティング思考・実践）をすることで、子どもたちが学校へ行くことが出来るようになり、給食を食べることで栄養状態が良くなる。さらに読み書きや計算が出来るようになることで人生における選択肢が広がる。このように小さな力で大きな成果が生まれる支援を実現していくことが SDGs の取り組みである。子どもの自由な発想はまさにバックキャスティング思考である。子どもたちの自由な発想を否定せず、今できることをフォアキャスティング思考で取り組むことが SDGs という大きな目標を達成するために必要である。

○ まとめ

子どもたちにわかりやすい環境問題への働きかけ方、SDGs に向けた活動として取り組みやすいものとして、ゴミ、水、食に関する事柄が挙げられる。例えば、ゴミ拾いをする際に調査シートを使い、どこに何がいくつ捨てられていたのか、なぜこの場所に落ちていたのか、このゴミが捨てられたままだとどうなるのか等、問いを重ねて子どもたちに考えてもらうことで社会にも働きかけることが出来、また、家庭でも親子で向き合うことで子どもの動きも変わってくると考えられる。

大人の私たちが出来ることとしては買い物の際、エコラベルを調べ、環境や SDGs に配慮された商品意識して選ぶことが大切である。中でも、FSC マークは森を管理する為の厳しい基準がある。このマークを選んで買い物をするだけでも環境保全活動につながる。また、保育者自身が自尊心や自己肯定感を持ち、いつも明るく朗らかで穏やかな心情を維持した上で、意識して買い物をし、生ゴミを堆肥化する、マイボトルやマイ箸を持ち歩く、ゴミを分別する等、環境に配慮して自ら様々な体験をすることで子どもたちに伝える幅を広げることが出来るのではないかと。そして、子どもの言葉や感じたことを受け入れ肯定することで子どもの次の気づきへとつなげ、より幅広い視野で活動することが出来るのではないかと。